るいは侵略的圧威の重圧が国民の集団的感情を強く沸き立たせないとすれば、国民の集団生活が既に解体、崩壊の危機に瀕しているためであつて、かゝ国際的環境に対する集団的反応を示すだけの集団的密度が国家生活において失われているからである。

愛国心の論議において、これを直ちに封建的感情あるいは超国家主義的感情として否定することは結局すべての国民的感情を否定し、やがては国民の集団生活自体をも否定する結果となるであろう。しかしまた国民の集団生活自体の民主化を否定するような愛国心を主張することは結局曾ての超国家主義の復活を要求する結果となるであろう。したがつて国民の集団生活の民主化を徹底すると同時に、民主的集団生活における結合密度を強化して、民主的集団感情の形成、強化を計ることこそ、現下の重要課題であるところの愛国心の民主化と強化を促進する最も基本的な方策であろう。

（昭二六・三・二一）一橋大学名誉教授

印刷インキ・塗料・染料・顔料
色ノ専門化学工業
大日本インキ
東京・日本橋通三ノ三

ハーバート大学時代

北吟吉

一、船旅

僕が早大の教授をやめてアメリカへ出掛けたのは大正七年九月の初めであつた。第一次大戦も終末に近く、日本は戦時成金の花盛りで、円価も世界一に高かつた頃であるから、各官庁も、民間会社も、官吏や社員を旺んに海外視察に派遣したものである。大抵は英国製のすばらしい洋服を着て、一等船客であつた。

勿論僕は長期滞在の留学生として出向くのであるから、一年以内で世界一廻りする官吏や、景気のいゝ外国支店詰めの会社員のような贅沢は出来なかつたが、故岩崎小弥太男が、音楽家を大成させる目的で山田耕作君をドイツにやつたと同様、評論家を大成させる目的で、自分のポケット・マネーで僕を欧米にやつて呉れたのであるから、月々の学費は当時文部省留学生が月額二百七十円であつたのに、二、三割くらゐ加へてあつたし、その上、旅費は汽車汽船共一等でどこへでも自由といふことであつたから、余りみすぼらしい生活はしなかつた。

シヤトル行の船は諏訪丸で、船長は西園寺公が全権大使としてパリに赴く時特に選ばれて船長にされたといふ当時郵船切つての古参船長の関根といふ人であつた。英語がうまく、社交にたけて、練れた人物であつた。この人には「霧深く、耳をそばだて、目を見張り」といふ船乗りらしい名吟がある。

一等船客には当時既に名士であつた人、後に天下の名士になつた人が沢山ゐた。三井物産専務の藤瀬政次郎、米国テキサス州グラスのサウザーン プロダクト カムパニー プレジデント

福島喜三次、鉄道省の鶴見祐輔、大藏省の青木得三、大藏省の若手官吏でロンドンの森財務官の許に赴く広瀬豊作大野竜太、京大教授内田銀藏博士、等の諸君がゐた。其の外に高木某といふアメリカ大学出のスポーツマンで、三井さんの親戚の愉快な人がゐた。女では三井の紐育支店長瀬古氏夫人と正金の紐育支店長一宮氏夫人がゐた。一宮夫人は元河原操といつて蒙古通の当時有名な夫人で、僕も敬意を拂つた。

僕は当時三十四歳で、鶴見君が同年青木君が一年上福島君が二年上、船中で初対面だつたが、一生交遊を続けることゝなつた。広瀬君とも将来懇意になつた。当時の私大の先生などはまだ肩身の狭い時であつたが、僕は既にロージャースの『哲学史』、Höffding氏の『近世哲学史』（樗訳より）ベルグソン哲学の解説書二冊、また当時洛陽の紙価を高からしめた評論集『光は東方より』『哲学より政治へ』等を出し、吉野博士、大山郁夫君の二先輩に伍して評論壇に活躍し、渡米の月には『中外』『雄弁』『黒潮』（当時は『改造』、『文芸春秋』などはなかつた）等の一流雑誌五種に巻頭論文を書いたほどであつたから、意気日本を呑むどころか、アメリカの思想界など眼中になかつた。何しろ、カント、ゲーテ、マルクス、クロポトキン、リップス、ベルグソン、クローチェ、リッケルトと手当り次第読んでゐた頃だから無理もない。

船中河原操さんからの提唱で毎日演説会が開かれることゝなつた。一高時代からの雄弁家として青に名高き鶴見、青木二君がゐるのが魅力であつた。毎日一人づつ演壇に立つた。両君は矢張りうまかつた。藤瀬氏福島君も相当味があつた。しかし、高木君のざつくばらんのアメリカ学生生活の話が一番実がある如く感ぜられた。何しろ一同はアメリカへ行かうとしてゐるから、一応アメリカは憧れの的である。僕は何を話したか忘れたが、一番横紙破りで、一番奇抜だつたので、文筆の士と思つてゐたに、口舌の徒でもあつたかとあきれた爲めもあるから、河原操さんの提案で二回やらせられた。

船は遂にヴイクトリヤにつき、ヴアンクーバーに着き更に、Seattleに着いた。他の諸君はこゝに泊る予定であつたので、僕は学校の入学をいそぐので一人で東に走つた。紐育では岩崎男の三菱銀行支店長山室宗文氏宛の紹介状を持参してゐるのと、後藤文夫氏の奥さんから令弟の紐育正金の加納君の預り物を持参してゐた。

三菱銀行の支店は当時同市第二の高層ビル エクィタブル ビルディング内にあつた。山室氏は同ビル内の最上層のバンカーズ・クラブで招待して呉れ

た。僕も当時禁酒会員であつたし、アメリカも禁酒国であつた。加納君は高層建築の間にはさまつた低い古風の、日本でいへば名物のおでんや式の家でビーフテキを御馳走した。了つて三井支店に高木君を訪問して在ボストンの日本人への紹介を頼んだ。同君は広島銀行の広岡君（有名なクリスチャン広岡女史の息）に打電して呉れた。

二、ハーバート大學入學

ボストンの停車場に着くと広岡君と同志社出身の藤田義彦君とが迎へて呉れた。さうして案内された宿は Cornbridge のウェア ストリート7の比較的高壯な建物であつた。藤田君の宿である。佛人系の未亡人がお婆さんと一人の跛者の小娘とで素人下宿を経営してゐたが、以前はドイツから交換教授としてハーバート大学の教鞭を執つてゐた Hugo Münsterberg 教授の住宅であつたとのことである。不思議な因縁もあるもので、僕は渡米の直前まで同教授の一九一四年出版のサイコロジー、ゼネラル アンド アプライドを教へてゐたものである。僕は主として文科の本科と高等師範部で教へてゐたが、かたはら、政治科、法科の予科でWundtの『心理学概論』や、Münsterberg の前記心理学を教科書としてゐたものである。喜多壯一郎、森下国雄、田原春次、中村高一、菊地義郎、吉川兼光等の元、現代議士等は一応僕に悩まされた方であらう。

ところが到着早々滑稽なことがあつた。僕の日本出発前に Münsterberg 教授は日本の新聞に「墜落して死んだ」と外国電報で載つてゐた。教授は米国で親独運動の中心人物と看做されて、米国人一般に嫌はれてゐたから僕は教室で同教授は楼上から身投げをやつて果てた、気の毒のことだと説明した。

故教授の家は三階木造建であつたので、宿の人に教授はこの三階から身投げしたのかと問ふたら、いや自殺ではない、街上で心臓病か脳溢血かで頓死したのだ。英語でいへば "dropped down dead" である。急死した、又は頓死したと訳すべきを、日本の新聞は墜落して死したと訳したものである。

米国へ来て先づハーバートを眼ざしたのは、一般に日本人は第一好みであるからである。僕もその例に漏れない。英国ではオックスフォードへ入学は試みたし、ドイツではベルリン大学に一年、ハイデルベルヒ大学に一年有半を学んだ。若し時間があつたらソルボンヌ大学で一年くらゐやつたかも知れぬ。時計はナルダン、手袋がデントといつた日本人の癖である。ハーバートはまあナンバー・ワン。行くならそ

こだとは潜在意識にあつたに相違ない。ニュー・イングランドの自然と伝統、之も魅力であつた。アメリカの哲学者として世界的水準に達してゐた二大学者 Josiah Loyce や William James が教鞭を執つてゐた大学、之も大きな魅力。又スペイン系の特色ある哲学者 Santayana も教へてゐたではないか。彼のハムレットやメフィストフェレスに関する論も、彼の『ドイツ哲学とその自負主義』"German philosophy and its Egoism"も既に日本で読んでゐた。"New Realism"の六人実在論者も、多少の新開拓はあるが、リアリストとしては英のバートランド・ラッセルには遙かに劣り、或はアレキサンダーに及ぶ者すらない。況んや、現代哲学の主流をなす実存派の哲学ハイデッガーやヤスパースの立場などとは、無縁の衆生である。外にアメリカの代表的な哲学者としては、チョン・デューイーが今尚光つてゐるが、彼のスタディス イン ロヂカル セオリーは既に日本で読んでゐた。ゼイムスの所謂タフ マインドネスの代表的思想家たることは疑ないが、世界観を求める僕に取つては、既に別世界の人であつた。当時のハーバートには一流の哲学者といはれるものはゐなかつた。Hocking が相当偉いといはれてゐたが書店にある書物を見たゞけで何となくオイケン流のアイデアリストだと思はれただけで、別に魅力がない。而も当時教授はガアバメント サーヴイス でワシントンへ出掛けて留守であつた。

それでも自分の履歴書を書いて大学事務所へ持つて行つて、フイロソフイデパートメントのポスト グラデュエイト コースへ入れてもらつた。名前は忘れたが、ドクトル何とかいふ先生のカント『純正理性批判』の講座を執つた。テキストはマックスミューラーの英訳本である。原典でどつしり研究するかと思つたら、とんでもない話しである。学期中に逃げ出した。当時哲学科のチエイアーマンをしてゐたアルフレッドヘンレイ教授のボザンケットのロジックの講義に出た。教授の名前は日本で聴いたことがなかつたが、ドイツ系でオックスフォード大学出で、ボザンケットの系統に属するとのことであつた。カント、ヘーゲル等のドイツ哲学の巨匠に精通し、英国の Caird, ブラッドレー、グリーン、ボザンケット等の英国のアイデアリズムの本流に通じ、近代ドイツ哲学に於ては、新カント派、フッサール、殊に Mainong に精通してゐた。僕はドイツ滞在中も能く文通したが、僕がドイツ文で手紙を出せばドイツ文で返事を呉れた。後にアームストロング大学に轉じ、更に南阿ヨハネスブルグ大学の哲学科長に轉じた。僕はこの教授には、ハイデルベルヒでリツケルトに私淑した以上に私淑した。蓋し、教授はアメリカの生活に親しませる有ゆる機会を作つて呉れたし、英国へ渡る時も、諸名士へ沢山の紹介状を呉れた。僕が大正十五年四十代の時 Ex Oriente といふ外国文雑誌に、「Lotze 及びバーデン学派に於ける妥当性概念に就いて」と題するドイツ語の論文に就いて、教授はヨハネスブルク大学から書を寄せて、論文の内容並びにドイツ語について大に賞讃を寄せられたが、僕も評論や政治の方面に脱線しなかつたら、純哲学の方面で相当の仕事が出来たらうにと惜しまないでもない。教授が小生在学一年の後英国に渡らんとした時に、インストラクダーにでもなつて、自分の研究かたく〳〵日本語と日本歴史でも教へてはと示唆されたが、之は辞はつてよかつたと思ふ。アメリカの環境では哲学者などは出る訳はない。

哲学の方では別に聴講するほどの講座がないから、フランス語の講座を取り、経済学の Carver 教授のマルクスの『資本論』の講座と、僕よりも若かつたが、『主権論』に関する著作を読んで感心したので、インストラクターに過ぎなかつたハロルド・ラスキの政治学の講義を聴いた。さうして、一緒に Carver の講義を聴いてゐた土方正美君(当時東大助教授)を誘つて、ラスキの講義を聴かせた。先見の明ありとでもいふか、彼も今日は英国労働党の輝ける指導者となつてゐる。僕は其の後の彼の著書は大部分読破した。

入学して間もなく、ヘンレイ教授夫妻に晩餐に招かれた。色々の話が出た。僕は家兄北輝次郎が日本を民主化するに支那革命を援助するに如かないと自費でこの運動を援けた話をした。之が教授の非常な興味を惹いた。教授も政治的には可なり進歩的で、Croly 君の主宰してゐた、ニュー リパブリック(週刊誌)に度々執筆してゐた、僕がドイツ滞在中も手紙を寄せて、自分が毎月匿名で同誌に執筆してゐるから、雑誌を取れば、自分の活動がわかるとまで知らせて呉れた。教授にはアイデアリズムといふ小著があるが、日本の進歩的学者は多く唯物論的であるのに、教授は観念論的であつて而も進歩的である。

僕は英国の学者ではグリーンを能く読んでゐた。〃プローレゴミナ オブ エスィクス〃〃プリンシプル オブ モラル オブリケーシヤン〃は殊に日本で精読してゐた。勿論新らしいものでは、ラッセルのものは皆読破してゐた。従つて此等の学者も話題の中心になつた。勿論ボザンケットの〃メタフィズィカル セオリー オブザ ステイト〃やホッブハウスの此の著に対する攻撃なども議論の中心になつた。僕は

支那や日本では「古の道」"ancient way"といふことが尊ばれ、伝統が物をいふから、安定と秩序がある。清朝や徳川期の如く三百年近い平和時代は西洋にはない。西洋には安定と秩序はないが、その代り、自由と進歩がある。僕は東洋の伝統に育つたが、西洋生活の根柢をなす自由と自律について研究を続けたい。自由の概念は基督教、殊に St, Augastin に認められるが、ギリシヤにはない。この概念の発展は、ストア哲学、スピノーザ、ロック、カントに依つて発展せられ、フランス革命、米国独立に具現された。僕がカントやベルグソンに傾倒し、青年時代、ペーター クロポトキンにまで心酔したのも、自由に憧がれたからである。自由こそ西洋文化の第一の遺産であるから、僕は三年間の予定の欧米留学中「自由概念の発展の歴史」を研究したいと思ふと述べた。

すると教授は大いに同情し、それならば、学位は取らなくとも、Candidate of Doctor になれ、図書館内は特別の座席は取れるし、研究に非常に便利だ。僕も早速好意を謝し、数日大理石の Widener 図書館に座席を得た。更に教授は貴君は自由を愛護する以上は、単なるデモクラシイには満足しまい。少数者の権利を主張するだらう。僕は答へた。その通りです。ロックの「反抗権」「革命権」「神に訴ふる権」ミルの「小数代表」「比例代表」等は何れも先刻詳知してゐる。教授は更に問ふた。貴君はヂェファーソニアンデモクラシーをどう思ふか。僕はヂェファーソンはデモクラシイの許に於て最大限の自由主義を擁護せんとしたものと解してゐる。その際、教授は自由主義を定義していつた。「自由主義は政治的、社会的に個人のイニシアチヴの可能的最大量を保障する原理である」といつた。この定義は立派であつて、今でも僕の頭に印象づけられてゐる。スペンサーに従へば、自由主義の極致はアナーキズムに至るといふが、之を阻止するのは"The possible greatest amount"といふ言葉である。三年前、議事堂の自由党総務室へ、濠洲の自由党代議士某君がやつて来て、貴君は自由主義をどう解釈するかとメンタルテスト的に聞いたから、前記ヘンレイ教授の定義を自分の定義として答へたら大に感心して、濠洲では今選挙が行はれてゐるから、自由党宛に激励の電報を打つて呉れといつた。僕は戦敗国の日本から、総司令部の許可なしでは、戦勝国たる濠洲の政争にタッチすることは穏かであるまいと辞はつた。然るに、彼は、「何に構はぬ、自分で責任を負ふ。党代表としてゞはなく、党の一有力者として打つて呉れ」と。よつて僕は「私は、日本自由党創立者の一人

として、世界に於ける自由主義の発展の爲めに、濠洲の自由党の選挙に於ける勝利を望む」と起草してやつた。ヘンレイ教授の示唆がえらい効果を奏した訳である。

三、米國生活への接觸

ヘンレイ教授は僕に向つて、貴君は米国にゐて書物許り読むのか、米国人に接触して、その生活をも観察をもしたのかと尋ねた。僕は卒直に述べた。「米国には単なる生活はあるが、生活に対する反省と理論に乏しい。之が米国に固有な哲学のない所以である。従つて米国では生活その物に触れたい。また米国のデモクラシイも理論も既に心得てゐるから、そのメカニズムを研究して、その実際的適用を把握する必要があるから、米国の憲法や行政法も一通り研究しようと思ふ」と。教授は衷心の同感を表し、夕食後 Twentieth Club の集会があるから、そこへ同伴しよう、殊に Miss Nichols は非常に進歩的な社交夫人であるから、夫人に紹介しようといつた。そうして食後、教授夫妻と共に、電車でボストンの Mount Vernon Place の Fisk Warren 氏夫人の宅へ案内して呉れた。主人は Henry George の単税論の熱心な支持者で、この主題以外には興味がないので出席しなかつた。夫人はボストンでも有名な美人で、有名な画家の Alexander 筆の夫人の肖像画がボストンの美術館に掲げてある。アイリッシュ系で、詩集もある。母堂は Ogoad と称し、神秘主義に興味を持つて居た。その晩の集りは瑞西生れの Gysi 君の神秘論を中心としたものであつた。この会合で僕は Miss Rose Standish Nichols に紹介された。夫人はソルボン大学の出身で、Architect Gardener で、『英国庭園論』始め沢山の著述がある。ヨーロッパへ二十数回も出掛け国際的社交婦人である。ヘンレイ教授が此の夫人に照会して呉れたのが縁で、三十数年後の今日まで僕は交際を続けてゐる。今年は夫人は七十六歳で、フィスクウォレン夫人は七十八歳で、何れも健在である。僕がハーバートにゐた当時は四十歳代で、ニコルス夫人の両親共生きてゐて New Humpshire 州の Cornish に別荘があつた。一九一八年の夏には僕はこの別荘に数日滞在した。Conish は Artist colony と称せらるゝ程で、ウイルソンの別荘も、ニューレパブリック誌のクローリ君の別荘も附近にあつた。僕はニコルス夫人の紹介で、日露戦争当時金子堅太郎氏などを援助したといふ Grey 夫人、米国第一の有名な慈善家 Adams 夫人等に知り合ひになつた。一九三二年二度の外遊の時は、元駐日大使の姪 Hooper 夫人（ヘー

ベート法律大学理事長夫人）や、ニューイングランド第一の別荘と称せらるMrs Crain Epswichの別荘で招待せられたのも、夫人が連れて行つたからである。此の年には、中国、タイ、日本等に外交官であつた十数名を僕の爲めに招待して呉れ、一九三九年には、僕をMount Vernon Streetの自宅に宿泊せしめ、ボストンの四大新聞の記者と有名なハーバートその他の教授を迎へて、自宅で座談会を催して呉れた。夫人は、一九二一年、オーストリイのモザートの生地ザルツブルグに開かれた国際婦人大会に、コロンビア在学の和田富子（現参議員高良富子）、ウェズレー・コレッヂの柏谷、滝沢両女史を（共に日本で知名である）参列せしめるに至つた。当時僕はドイツのハイデルベルヒにゐたが、ドイツの有名な平和運動者トロイベルヒと婦人が、ニコルス夫人の紹介状を持つて、僕を寓居に訪ひ、僕も誘はれてザルツベルヒに行き、米のアダムス夫人、ロマン・ローランの妹、バルフォー卿の孫女、ハーバート大学総長エリオットの孫女ウィリアム・ゼームスの姪や、マルクスの孫のロンゲ君、ベルリン大学の助教授『戦争の生物学』（故山本宣治の訳あり）ニコライ等と知り合つた。

僕がハーバートに在学したのは、一九一八年の九月から翌年の七月迄であつたが、一度ニコルス夫人に紹介されてから、各方面に紹介されたので、一週二回くらゐは燕尾服を着なければならぬほどであつて、ヘンレイ教授が米国の生活を知らせるといつた一言が、今日まで影響を持つてゐる。一九二二年二度目に渡米しボストンに行つた時、新設の教授クラブの日本人として最初の臨時会員とされたのも、僕がボストンに多くの知り合ひのあつた爲めである。僕が一九三九年三度目に外遊し、ノルウェー国オスローの万国議員会議参列演説の任務を果した後、ボストンに立ち寄り、ボストン第一の富豪アングソン夫人（元駐華大使未亡人）に招待され、更に紐育の若槻総領事が僕の紹介で、ニコルス夫人に近づき、日米親善、日米諒解の運動を始めたのも、僕の第一回米国留学の米人生活接触の賜物である。

四、米國留學生の日本人との接觸

ミュンスターベルヒ教授はその著"The americans"に於て、アメリカには三つの中心があり、ワシントンは政治の中心、紐育は経済の中心、ボストンは知的中心（intellectual center）であると述べてゐる。ボストンは、ハーバート大学、ラディクリフ女子大学、ボストン・テクノロジイ等の有名な学校がある。また附近には、ニマスンの居住地として名高いコンコールド、独立戦争で名高いレキシントン、その他ソロー、ロングフェロー、ホーソン等の遺跡があり、植民地時代の遺風も認められる。ボストンの美術館はミレイのコレクションで有名であり、殊に東洋美術のコレクションでは日本以外では世界第一の定評があり、浮世絵だけでも五万点もある。日本から渡米する漫遊客は大抵ボストンに立ち寄る。僕のケンブリッヂ（ボストン隣接の地）滞在中も色々の名士がやつて来た。早速僕を訪ふた者は内田銀蔵博士である。小生の宿で食事をして、京大、同志社大学で教鞭を執つてゐたロンバルド氏が帰米してゐたので、同志社出身の藤田君が交渉して、ロンバルド夫妻と共にコンコールドを訪ふた。夫人が自動車を操つた。米国へ着いた時は、婦人に運轉させていゝものかと疑つたが、今日では何人も疑ふものはない。其の後間もなく、鶴見祐輔君が僕の宿を訪ねた。同君は同船して渡米した時は左程でもなかつたが、紐育滞在中英語の演説に非常に精出して、あのような英語演説の名手となつた。僕は文字通り書物ばかり読んでゐて、今でもブロークン・イングリッシュである。しかし、書物は三日に一冊平均を読むことに願をかけて、月十冊、一年に百冊くらゐ読んだと思つてゐる。これが昭和二十二年の憲法改正議会で、僕には大に役立つた。

永井柳太郎君も僕を訪ふて来た。大正六年の金沢の立候補では中橋氏に負けたし、その年の早稲田騒動で早稲田を追はれ、山本虎大尽の後援で世界漫遊に来たので、自然僕に身の上相談をした。しかし、僕は留学三年が四年半に延びて帰朝したら、立派に代議士に当選して、幣原外相の部下で外務参与官になつてゐた。大正八年には熊本出身の縁故で山室宗文氏の紹介で大塚惟精君が訪ねて来た。一緒にボストン医学大学長に自宅で御馳走になつたことを覚えてゐる。同君とはその後英国でも、フランスでも、ベルリンでも能く行動を共にし、一生親交を続けたが、広島で爆死した。又中学当時の弟子の三菱造船の岡野保次郎君と深尾君とが僕を訪ねて来て、一緒にコンコールドに行き、ロイド会社の紹介で、Fall Riverの造船場を見たが、同じ聯合国の関係で、何でも明け放しで見せて呉れた。岡野君は戦後に三菱重工の社長となり、深尾君は三菱の名古屋の発動機の会社の社長になつたが、追放された。

僕を訪れた日本人の大物は安達謙造氏であつた。コロンビア在学の日本人学生が、ボストンでは北君に世話になれといつたとかで、僕に打電して来た。ボストンでは石川といふ日本人の商人の宅で歓迎会があつた。安達さん

は自分は世界一のもの、さもなくば米国一のものを見たい、又大金持の居るところや貧乏人の居るところを見たいと、仲々要領のいゝことを頼んだ。僕はハーバート大学の総長ローウェルさんに安達氏を紹介したら、更に政治科のHart教授を紹介して呉れた。教授はボストン市長のPeterが教へ子であると紹介して呉れ、又マサチューセット州知事クーリッヂに紹介して呉れた。安達さんは大隈内閣の外務参政官の前歴があつたので、知事は州庁で正式に面接した。背後に米国国旗が飾つてあつた。僕が知事に安達さんを紹介したら、How can I serve you？と聞かれた。簡単な挨拶だが、日本の官僚とは何となく親しみが違ふと感じた。僕が安達さんが元外務参政官であつたといつたら、外務参政官が英語が出来ぬでもよいかと問ふたから、安達さんは漢学の大家で、日本は支那との外交が大切だから安達さんは適任だつたと、気轉をきかせたら、成程と大きくうなづいた。知事は安達さんには何か他に特徴があるかと問ふたから、この人は「選挙の神様」といはれ、選挙通であるといつたが、感違ひしたか、この人は日本にデモクラシーを促進した人かと問ふた、まさか、干渉と買收で票集めのボスともいへないから、そうですと答へたら、なるほど悧巧さうだと僕にいつた。"He looks very clever" 如何にも米人らしい。クーリッヂは後に大統領となつた人で、冷靜で、言葉のゆつくり落ちついた態度は米人としては稀な方である。安達氏もえら相だと称めてゐた。僕は安達さんをボストン美術館、ハーバート大学、フォッグミュージアムのガラス細工等を見せ、更に貧民救助のことを知らせたいと思つてセットルメントを経営してゐる有名なWoodさんに紹介した。

ダラスの福島喜三次君からクリスマスの休みに是非来いと招待されたので、ボストンからテキサス州に向つた。氏の奥さんは外交官杉村陽太郎氏の妹で、一家親切にして呉れたので、三週間ばかり滞在した。元旦には大雪が降つた。僕は「アラスカもキャナダもなべて雪の朝」と一句やり、奥さんが、米国にゐてさへ、今日は元旦だから泣くなと子供にいふのが興味深く感じたので、「元日や今日は泣くなと母らしく」と駄句つた。正月は社員と話し暮した。滞在中、同船して来た三井物産の専務藤瀬政次郎氏や当時住友の総理事の湯川寛吉氏などが福島氏を訪ひ来り、自動車で茫々たる綿畑を視察した。この時始めてロータリー・クラブの存在を知り、福島氏に連れられて、僕も出席し一席の講演をやつた。学生時代心酔してゐた虚無党公爵クロポトキンの学説の紹介をやつた。今考

へれば随分突飛な話しである。十三年間滞米の福島さんに通訳を頼んだ。僕はこの縁故で福島君とは死ぬ迄懇意にし、上海や大阪でも度々会食した。何でも、日本ロータリークラブは福島氏が米山梅吉氏に相談して出来たものだとのことである。福島氏は僕に旅費として千円寄附して呉れたので、Hueston Galveston等を経て、ミスチッピー河を渡り、New Orleanに出て、メキシコ湾を北上して、ワシントンに出、更に各地を旅行して、フィラデルフィアに馬場辰猪氏の墓に詣り、勿論フランクリンの墓や、独立戦争のベルや旗なども見た。

紐育では暫らく滞在した。偶々後藤新平氏が来たので、山室氏の堂々たる歓迎会に僕も招待された。財務官の田昌君、河上清等が同席したが、鶴見君は何かの都合で見えなかつた。紐育では僕の旧弟早大理事赤松俣雄君が万事世話をして呉れ、関西大学総長岩崎卯一君がコロンビア大学のGidding教授やPeard教授へ、僕の希望で紹内して呉れた。故の中野登美雄（早大総長をやつた）等も尋ねて来た。岩崎君や中野君がコロンビヤのドクトルを取るといつたのが、僕には不満でもあり、不思議でもあつた。当時早稲田あたりでも、専門部出のものなら米国の学位を取るのもよいが、大学部出は取るべきでないと考へてゐた。米国ドクトルはアメドクといつて馬鹿にしてゐた。殊に僕等の専門の哲学の方ではドイツ語が万能で、米国で哲学などをやつたといへば、馬鹿にされてゐた。ところが、敗戦後はアメドクも値上りで、米国行きが大流行で、僕が二三ケ月行つても箔がつくことゝなつた。変れば変る世の中である。

紐育では赤松君の肝入りで、コロンビア大学在学の日本の女学生を全部僕が招待して、皆さんの意見を聴くことにした。中条百合子（後の宮本夫人）和田富子（高良富子）さん等六七名が日本料理に集まり、男子は赤松君だけであつた。給仕人は元の坪内ホームス夫人であつた。僕が和田さんをニコルス夫人に紹介したのもこの会合が機縁となつたのである。僕は紐育で"Nation"誌のヴィラード博士や、ランド、スクールの某々社会主義者を訪ふたのもこの時である。ニコルス夫人も紐育に出られたので、富豪のモルガン氏邸へ連れて行かれた。

五、その他の雑感

僕がボストン滞在中演説で印象の深いのは、タフト前大統領の演説、国際聯盟加入是か非かに就いてのハーバート大学総長ローウェル氏と上院議員カルビン・ロッヂ（今のロッヂ上院議員の父）の大討論（司会はクーリッヂ知

事)、エール大学教授フィッシャー氏と米国総同盟のゴンパースの代理某との討論等であつた。又有名なフートン、マンド ミフレイ コンパニイの出版部長 Greenshet 夫人にコンコールドに案内せられ、ゼームス教授の親戚の家に行き更に其の上の案内でエマスンの家の中に這入つて遺物を詳しく見たことである。

米国滞在中僕は英語で唯一回公開演説をやらせられた。それは一九一九年の二月クーリッヂ氏司会の「東洋人より見たる国際聯盟」の議題で、印度代表、支那代表、及び日本代表が演説をやることゝなつた。日本留学生の団体は、当時六七十名もゐたと思ふが、僕に出よといふことになり僕が出た。印度代表も支那代表も共にハーバートのドクトルであり、僕は日本を立て半歳目である。而も出演の当日ペーパーでも用意しようと思つてゐる時、友人のフィリッピンの学生が尋ねて来たので一緒に支那飯を食ひに行つたから三時からの会合には無準備で行つた。それでも、日本は一等国であるので、印度代表、支那代表、日本代表と順序でやつた。僕の出来は勿論一番出来が悪いと思つたところ、演説後には僕への握手が圧倒的に多かつた。翌日の新聞にも、日本代表の英語は一番拙いが、思想はすばらしいと褒めてあつた。英語の下手なのが却つて愛嬌があり、咄弁の雄弁だつたかも知れない。

簡単に当時の学生の生活状態を述べよう。僕は引き越しが好きで、三度引き越した。室は一週五弗くらゐであつた。食事は最初の室で十人くらゐ一団で採つたが、週七弗くらゐと記憶してゐる。大学の食堂でもそんなものであつた。従つて、一月室代と食費で五十弗未満であつた。僕は月百六七弗費つてゐたから、残りの百弗以上が授業料、書籍代、衣類、その他の小遣ひであるから、暮しは実に楽であつた。僕は当時は酒も煙草も飲まず、一週に一度映画に行つたゞけであるから、経費はいらなかつた。

一九一九年の七、八二ケ月は渡英の前であつたから、ニューハンプシヤ州のハンノヴァーに避暑した。グートマス コレッヂの夏期講習を執りたいと思つたが、中止になつた。避暑中に三つばかり駄句つた。「そのあたり鍋釜のなき夕すゞみ」「日ざかりの蟬なき里につきにけり」「うすものを着すして何の夕すゞみ」二ケ月実にゆつくり読書が出来た。フランス語を教へてもらつた。マーヂン君、ダンナム君等の若き教授とも友達となつた。宿の婦人の関係で、ダートマス卒業のスミス君と懇意になり、鯨船で有名な New Bedford へも遊びに行つた。此のスミス君は三年前、ストライク委員会の一員

となつて来朝し、僕の健在を知り、拙宅へやつて来た。ニコルス夫人の姪の Shurchif 嬢と共に僕は大に歓待した。僕はスミス君及その友人に依つて一夕帝国ホテルで招待された。この原稿を書いてゐるペーカーは其の際のスミス君の贈物である。僕がハンノヴァーで浮世絵を呉れたのを覚えてゐて返礼の積りであらう。

最後に僕が滞米中赤面した大失敗を二つ記して思ひ出の記事を終ることゝする。第一は僕が毎日食事する食卓の一人にコリンズといふインディアンプラッドの交つた小学校の女教員がゐた。風采はそう良くなかつたが、気立が非常によかつた。食卓の全員は何れも彼女に親しみを持つてゐた。一日この夫人が温さうな毛糸で靴下を編んでゐた。僕は気軽な気分で毛糸を買つて来るから、一足編んで呉れないかと頼んだ。コリンズ嬢は顔を赤めた。何んだか変だなと思つて、宿のお神に聞いたら、女に向つて肉体に附ける物を欲しいなど言つてはならぬものと聞かされた。如何に万巻の書を読破しても、その国に来なければわからぬことがあるなと反省した。次には更に大きな赤毛布式を発揮したことがある。大学生ブラット君、メキシコからの留学生ビネダ君、マカッドル夫妻、コリンズ嬢、藤田君等が一緒に食事をして雑談中、僕はヘソの話を持ち出した。日本では滑稽な存在で、「臍繰り金」「臍茶を沸かす」「臍を曲げる」「臍の緒を切つて以来」「臍を噛むも及ばず」等々臍談義を大にやつた。一同は不思議相な顔をして聴いてゐたが、富豪の息で気取り屋のブラット君が突如立ち上つて食卓を去つた。暫らくすると、お神がやつて来て、臍の話をやるなと注意し、且つ理由は後で話すといふ。僕は何となく気不味く感じてゐたが、女の前で臍の話などは大無礼だと解つて、大変なことを仕出かしたと恥ぢ入つた。そうして、僕の口からいへぬから、お神から、皆に釈明してもらうことにした。滑稽なことが滑稽で通らぬ著しい実例である。

米国学生生活で以上の二大失敗をやつた御影で滞欧三年半一度もこんな失策はなかつた。矢張り学ぶだけではいかぬ、習ひが大切である。米国のデモクラシーも学ぶことだけでは駄目で、矢張り習ふとこまで徹底しなくてはいかぬ。孔子はいつてゐる。「学んで時に習ふ亦悦ばしからずや」と。

追記

本号より「我時談会の追憶」と題して同好会結成当時の裏面史を中心として玩存する談会人に及ぶ筆を連載する後定であつたが、資料整理の為、次号より掲載することになつた。御期待を乞ふ。

なほ前号所載の「追放談」中、日銀理事太田剛とあるは局長の誤りで、理事に同姓の入があることの申入れがあつたので訂正いたします。(編輯部)